

船倉を破ること．新しく生まれること．
—エメ・セゼール『帰郷ノート』について

小松 正道

" *Aimé Césaire qui, à l'insulte, répondit aussi un jour :*

« *Eh bien le nègre, il t'emmerde !* »."

— Audrey Pulvar⁽¹⁾

序

2010年10月15日にフランスのテレビ局フランス2の昼間のトーク番組において、香水メーカーの創業者一族ジャン=ポール・ゲランが半生を振り返り、「そのときばかりは私はニグロみたいに働きました。もっとも、ニグロがいつもそんなによく働くのかどうか知りませんがね……」(Pour une fois, je me suis mis à travailler comme un nègre. Je ne sais pas si les nègres ont toujours tellement travaillé, mais enfin...)と述べ、司会者の愛想笑いを誘った。この人種差別発言は見過ごされるわけもなく、すぐさまほかのメディアでも伝えられるところとなった。18日、ジャーナリストであるオドレイ・ピュルヴァル (Audrey Pulvar)⁽²⁾はフランス・アンテル(France Inter)の自身のラジオ番組で抗議の弁を述べた。両者の発言はYouTubeなどの動画共有サイトを通じて世界へ発信されたが、なかでも多くの人々に強い印象を残したのは、オドレイ・ピュルヴァルによる、「私はニグロ、いつまでもニグロ」(Nègre je suis, nègre je resterai)という力強い発言と、その発言の元にもなった同名のエメ・セゼール (Aimé Césaire 1913-2008)へのインタビュー集⁽³⁾からの引用だった。

フランス共和国海外県マルティニーク島の詩人エメ・セゼールは、2008年4

月に亡くなった。誕生した当時のマルティニーク島はまだ海外県といった一定の自治権を持った地位にはなく、フランスの最も古い植民地の一つであった。1947年にフランスの海外県となったが、「自治ではなく独立を！」という声は今も聞かれる。そのマルティニーク島で行われたフランス共和国国葬にて送られた直後に、セゼールを「フランスの偉人」が祀られている霊廟パンテオンに入れるという話が政府内外に持ち上がった。しかしカリブ海マルティニークの詩人をパリのパンテオンに葬ることは大きな論争を呼び、最終的には海外県担当大臣イヴ・ジェゴ (Yves Jégo) の「彼から帰郷を奪うのは過ちになるでしょう。」(Ce serait une erreur de le priver de son retour au pays natal.) という言葉とともに沙汰止みとなった。世界中の黒人を奮い立たせ、アフリカ諸国の独立や合衆国での黒人の公民権獲得の原動力になった反人種差別、反植民地主義のイデオロギーでもある詩人を宗主国が回収し「フランスの偉人」として祀ることは、その意に反して多人種国家統合と同化政策の象徴になるはずであったが、2008年にはセゼールの身体をマルティニークから取り上げることは叶わなかった。ところが2009年の複数の海外県での連帯を伴った長期間にわたる大規模なゼネストを経た2011年1月初旬に、共和国大統領ニコラ・サルコジによって再びセゼールのパンテオン入りが検討されていると報じられている。いま私たちの前には、反人種差別、反植民地主義の象徴としてのセゼールと、海外県の共和国への同化の象徴としてのセゼールがいる。

本稿で論じる『帰郷ノート』*Cahier d'un retour au pays natal* はエメ・セゼールによって発表された最初の長詩である。1939年にパリの『ヴォロンテ』誌 *Revue Volontés* に29ページにわたって掲載されたもの⁽⁴⁾ が初出であるが、これは当時さほど話題にはならなかったという。奨学金を得てパリに学んでいたセゼールはこの掲載と同時期にマルティニーク島へと帰郷した。第二次世界大戦のさなか、海上封鎖されたヴィシー政権下の島で母校シェルシェール高校の文学教師として勤める傍ら、セゼールは仲間うちで『熱帯』*Tropiques* という雑誌を発行していた。マラルメやロートレアモン、マルティニークの文学について論じられていた『熱帯』誌は、ニューヨークへの亡命途上、船が島に強制的に寄港さ

せられ下船していたアンドレ・ブルトンの目に止まった。セゼールとブルトンは交遊を結び、その影響のもと『帰郷ノート』は新たな発展を見せることになる。1942年4月には『熱帯』誌の第5号に『帰郷ノート』はやや短めに、*En guise de manifeste littéraire* という題で姿を現している。その後、再び『帰郷ノート』の題で1947年のほぼ同時期にニューヨークではブルトンの序文付きのプレントアノス社版が、パリではボルダス社版が出版され、1956年に至り、セゼールも設立に関わったプレザンス・アフリケヌ社から決定版が出版されている。『ヴォロンテ』に掲載された初出から決定版に至るまでの諸本には多くの加筆や削除が見られ、またそれ以降の諸本にも節の区切り方の異同がある。セゼール研究者のLilian Pestre de Almeidaによると決定版では、全体は9つのパートに分かれ全184節から成るということである⁽⁵⁾。本稿では現在のところ最も新しいスイユ社版『全詩集』を用い、節の区切りについてはLilian Pestre de Almeidaのものを用いることとする。

『帰郷ノート』には黒人、なかでもとりわけマルティニークの黒人が如何にして新たな自己意識を獲得するかという問題が描かれている。マルティニーク黒人は奴隷制度と植民地主義によって世界との関係を絶たれ孤立した存在となるが、彼らの自己意識はそれでもつねに外在性に依存していた。たとえば、植民地の支配者であるヨーロッパ人に少しでも似るように、白人らしく振る舞うことにいそしんだり、混血の度合いによる肌の色のわずかな濃淡によって優越感や劣等感を感じたり、それとは反対に、地理的、および数百年という時間的な断絶にもかかわらず、「我々はアフリカ人である」と自分に思い込ませようとしたように、ヨーロッパへの憧憬や同化の意識や、アフリカへの耽溺といった外部への依拠なしには彼らは自らの存在を肯定しえなかった。ヨーロッパやアフリカという外の世界と自分とを結びつけることによってしか自分の存在を証明する術を見いだせないでいるこの病をセゼールは『帰郷ノート』でどのように描き、どのように克服しようと試みたのか読み解くことを本稿の目的とする。

1. 島と住民の現状

まず詩の冒頭部分では、ある島の悲惨が描かれている。詩には「アンティユ諸島」やマルティニークの隣の島である「グアドループ」という名前が登場し、「トリニテ」や「グランリヴィエール」といったマルティニーク島北部に実在する地名もまた現れるが、詩の中には一度も「マルティニーク」という固有名詞は登場しない。ともあれこの「ある島」の惨状について見てみよう。

Au bout du petit matin bourgeonnant d'anses frêles les Antilles qui ont faim, les Antilles grêlées de petite vérole, les Antilles dynamitées d'alcool, échouées dans la boue de cette baie, dans la poussière de cette ville sinistrement échouées. (st.2) (p.9)⁽⁶⁾

暁の果てに脆い入り江から芽生える腹を空かせたアンティユ諸島、疱瘡のあばただらけのアンティユ諸島、アルコールに爆破され、その湾の泥の中で、この不吉に座礁した街の埃の中に座礁したアンティユ諸島。

あばただらけ、というのは島が火山に富むことに基づいているのだろう。1902年のブレ山の大噴火によって当時のマルティニーク島の中心都市であったサン・ピエールは生存者わずか2名を残して壊滅した。またアンティユ諸島の当時の主な産業はサトウキビ栽培と、サトウキビから作られるラムの製造、輸出であった。サトウキビ農園での重労働に加え、比較的簡単に手に入れられるラムの酒害で身を減ぼす労働者が多かったという話も伝わっている。「腹を空かせた」という言葉はサトウキビの単一栽培のために食糧供給がつねに滞っていたことをも思い起こさせる。そして、ここでは島は「座礁した街の埃の中に座礁」しているとある。それではその街はどのように描かれているのかを見てみよう。

Dans cette ville inerte, cette foule désolée sous le soleil, ne participant à rien de ce qui s'exprime, s'affirme, se libère au grand jour de cette terre sienne. Ni à l'impératrice Joséphine des Français rêvant très haut au-dessus de la négraille. Ni au libérateur figé dans sa libération de pierre blanchie. Ni au conquistador. Ni à ce mépris, ni à cette liberté, ni à

cette audace. (st.11) (p.11)

この無気力な街で、太陽の下で悲嘆に暮れるこの群衆、自らのものであるこの地で、白日の下に自らを表現し、確立し、解放するいかなるものにも与らない。黒ん坊たちのはるか上で夢見るフランス人たちの皇后ジョゼフィーヌにも。解放の身振りのまま白い石に硬直した解放者にも。コンキスタドールにも。その侮辱にも。その自由にも。その大胆さにも。

無気力が街にのし掛かっている。ナポレオン一世の妻「皇后ジョゼフィーヌ」はマルティニークの白人の大農園主の家に生まれた。フランス革命のさなかに一旦廃止された奴隷制がナポレオンの即位とともに復活したのにはそのような出自を持つ彼女の影響があったことが知られている。つまり「皇后ジョゼフィーヌ」は島出身の白人によって守られた奴隷制度維持という、黒人にとっての「屈辱」的な象徴として捉えることができる。「解放者」とは、1848年の最終的な奴隷制度の廃止に努めたヴィクトル・シェルシェールのことであろう。マルティニークには今日、白い石で作られた彼の像が点在する。シェルシェールの名は首府フォール・ド・フランスからほど近い町の名になり、セゼールがかつて在学し帰郷後に勤めていた島一番の学校も、その町にあるシェルシェール高校である。シェルシェールはいわば島の「自由」の別名であるが、その「自由」は「解放の身振りのまま白い石に硬直」している。奴隷制からの解放は解放後も残された社会構造のために、そのまま人間の解放とはならなかった。「コンキスタドール」についてであるが、マルティニークは1635年に先住民族の激しい抵抗を抑えた「大胆」な征服者、コンキスタドールによって支配された。先住民族はさらなる武力抵抗や、入植者によってもたらされた新種の病気、大農園での強制労働の結果滅び、そのかわりとしてアフリカからの黒人奴隷が導入されることになる。「コンキスタドール」とはいわばカリブ海に白人の秩序をもたらし、重たい歴史の端緒を開いた存在である。「奴隷制度」と「硬直した自由」と「白人の秩序」、今日のマルティニークの住民はその歴史的恩恵にあずかることもなく、いまや自分のものであるはずの土地で、抑圧を受けたままの状

態で暮らしている。

飢餓と災厄とアルコールと無気力と抑圧とが、島と住民の現状なのである。

2. 帰郷、普遍性への働きかけ

彼らの状態を軽蔑する詩人はしかし、その多くが奴隷制度と植民地主義の残した深い傷跡であること、一方、自分自身もまた多くの同胞と同じく自らの存在が宙に浮いたままの状態にあることもよく自覚している。この状態から脱出するかのように詩人はヨーロッパに旅立つ。そして、白人からのけ者にされその世界の周縁に存在している人々をそこで見出すのだった。

Comme il y a des hommes-hyènes et des hommes-panthères, je serais un homme-juif
un homme-cafre / un homme-hindou-de-Calcutta / un homme-de-Harlem-qui-ne-vote-pas
(st.37) (p.19)

ハイエナ人間や豹人間がいるので、私はユダヤ人間になろう
異教徒人間に／カルカッタのヒンドゥー人間に／投票しないハーレムの人間に

ここでは黒人種という限定なしに、詩人は世界の様々な疎外された立場の人々と自らとの同一化を図っている。白人を「ハイエナ人間」「豹人間」と呼び、彼らに対して自身は「ユダヤ人間」に「異教徒人間」に「カルカッタのヒンドゥー人間」に、「投票しない合衆国のハーレムの人間」になろう、と述べている。これら同一化の対象はすべて白人から疎外された存在である。そしてそれらは「人間」homme という単語と組み合わせられていることに注目しなくてはならない。人間扱いされているかどうかあやしい存在に「人間」という単語をあえて結びつけることによって、彼らが人間であるにもかかわらず、白人世界の外側に置かれていることを示しているのである。黒人種に限定されない、白人世界において疎外された人間であるという共通点をもとにして、詩人はここで、白人世界の様々なのけ者たちの一員としての自己認識を得たのである。

このような世界における自己の位置づけを獲得し、詩人は島への帰郷を試みる。帰郷の様子は次のように夢想される。

Partir. Mon cœur bruissait de générosités emphatiques. Partir... j'arriverais lisse et jeune dans ce pays mien et je dirais à ce pays dont le limon entre dans la composition de ma chair : « J'ai longtemps erré et je reviens vers la hideur désertée de vos plaies ». / Je viendrais à ce pays mien et je lui dirais : « Embrassez-moi sans crainte... Et si je ne sais que parler, c'est pour vous que je parlerai ».

Et je lui dirais encore : / « Ma bouche sera la bouche des malheurs qui n'ont point de bouche, ma voix, la liberté de celles qui s'affaissent au cachot du désespoir. » / Et venant je me dirais à moi-même : / « Et surtout mon corps aussi bien que mon âme, gardez-vous de vous croiser les bras en l'attitude stérile du spectateur, car la vie n'est pas un spectacle, car une mer de douleurs n'est pas un proscenium, car un homme qui crie n'est pas un ours qui danse... » (st.42) (p.21)

出発だ。私の心は仰々しい寛大さで満ちていた。出発する……私はなめらかで若々しく、私のものであるその国に到着するだろう、そしてその泥土が私の肉の組織の中に入り込んでいるその国に言うだろう。「私は長い間さまよった、そしてあなたの傷の見捨てられた醜さに向かって帰るのだ」と。／私は私のものであるその国に帰り、そして言うだろう。「恐れずに私を抱きしめてください……そして私には話すことしかできないけれども、私が話すのはあなたのためなのです」と。

私は続けて言うだろう。／「私の口は、口を持たぬ不幸の口となるでしょう、私の声は絶望の牢獄で衰弱している声の自由となるでしょう」と。／そして訪れる時には私は自分自身に言うだろう。／「そしてとりわけ私の体よ、私の魂よ、見物人の不毛な態度で腕組みすることのないよう用心せよ、なぜなら人生は見世物などではなく、苦悩の海は前舞台ではなく、叫ぶ人間はダンスをする熊ではないのだから………」

詩人は「その泥土が私の肉の組織の中に入り込んでいるその国」というよう

に自分がマルティニークの一員であるという自覚をここで表明し、その上で帰郷を試みる。アンティユの疎外された人々を世界ののけ者の一員に組み込もうとしているのである。「私の国」に対して「あなたの傷」は醜いと言い「恐れずに」と言いながら、慎み深げに「話すことしかできない」という「私」は、自らが話すことで言葉を持たぬ人々の代弁者になるべく意気込んでいる。「苦悩の海」を前にして「叫ぶ人間」のその叫びに慎重に耳を傾けるよう自分に言い聞かせてはいるが、詩人が叫び声の中から何を聴き、そこから詩人の口で何が話されるのかは明確にされてはいない。ただ単純未来形での、意気込みが伝わってくる夢想である。そして次の節にすぐ、より現実的な帰郷の描写が現れる。

Et voici que je suis venu!

De nouveau cette vie clopinante devant moi, non pas cette vie, cette mort, cette mort sans sens ni piété, cette mort où la grandeur piteusement échoue, l'éclatante petitesse de cette mort, cette mort qui clopine de petitesse en petitesse; ces pelletées de petites avidités sur le conquistador ; ces pelletées de petits larbins sur le grand sauvage, ces pelletées de petites âmes sur le Caraïbe aux trois âmes, et toutes ces morts futiles (st.43) (pp.21-22)

そして私はやってきた！

またも私の前には跋行するこの人生、いや、この人生ではなく意味も敬虔さもないこの死、偉大さがみじめに座礁するこの死、この死の明白な卑小さ、卑小さから卑小さへと足を引きずるこの死、コンキスタドールに群がるこの夥しい卑小な貪欲さ、偉大なる野蛮人に群がるこの夥しい卑小な下僕たち、3つの魂を持つカリブ人に群がるこの夥しい卑小な魂たち、そしてこれらすべての無意味な死

第42節とこの第43節は夢想と現実という対照になっている。「そして私はやってきた」と帰郷の夢想から実際の帰郷へと遷っている。それではこの現実においてはどうか。 「コンキスタドールに群がる」「偉大なる野蛮人に群がる」「3つの魂を持つカリブ人に群がる」とあるが、「コンキスタドール」は先に述べたように白人の征服者、また「カリブ人」とはアンティユ諸島の先住民

族であるインディオの部族である。それならば二つ目の「偉大なる野蛮人」とは奴隷として島にやってきた先祖のアフリカ黒人を指しているということが推測できる。島の人々の人生は征服者や、アフリカの祖先や、あるいは先住民であるカリブ人に自分の魂の抛り所を求めており、過去に依存することをやめない。彼らは卑小さの中に生き、過去のみを見つめるだけで、未来の新しい世界を作り出そうなどとは思ってもいないのだ。アンティユ黒人の過去の特殊性が持つ問題をユダヤ人やヒンドゥー教徒やハーレムの黒人の諸問題と並べて、それらを普遍的な問題へと止揚する試みは失敗に終わった。第42節において単純未来で述べられていた事柄はやはり、過剰な自信に満ちた絵空事にしか過ぎなかった。

3. アフリカへの耽溺

帰郷は失敗した。詩人は次にアフリカへと目を向ける。そして、いっそ「偉大なる野蛮人」としての過去を取り戻すことができれば純粋な自己認識を獲得できるのではないかと詩人はコンゴのファン族との自己同一化を試みる。

Qui et quels nous sommes? Admirable question!

A force de regarder les arbres je suis devenu un arbre et mes longs pieds d'arbre ont creusé dans le sol de larges sacs à venin de hautes villes d'ossements

à force de penser au Congo

je suis devenu un Congo bruisant de forêts et de fleuves (st. 56) (p.26)

我々は誰でなんなのか？ 素晴らしい質問だ！

木々を見ることによって俺は一本の木になり、俺の長い足は地中に大きな毒囊とわずたかい骸骨の街を掘り当てた

コンゴのことを思うことによって

俺は森と川が鳴り響くひとつのコンゴになった

詩人は「言葉を持たないものの代弁者」という特権的な立場から一旦退き、「それでは我々は何者なのか」と彼らとともに「我々」としての自分たちの存在を問う。ここで詩人は「見る」こと、「思う」ことによって魔術的に、「俺」を木やコンゴに同一化させている。それらは地中の奥深くに毒囊と骸骨の街を探る根を持ち、あるいは森と川をそばに持つという、どちらも野性的なイメージを伴っている。さきの「帰郷」で試みた普遍性への働きかけではなく、個人的な想像力の拡がりが見て取れる。詩人はさらにアフリカへの耽溺を深めていく。

Mais pourquoi brousse impénétrable encore cacher le vif zéro de ma mendicité et par un souci de noblesse apprise ne pas entonner l'horrible bond de ma laideur pahouine?

voum rooh oh / voum rooh oh / à charmer les serpents à conjurer les morts (st.64-65)
(pp.27-28)

だが分け入りがたき叢林よ、なぜわが赤貧のいきいきとしたゼロをまだ隠し、学び取った気高さを気にかけて、わがファン族の醜さのおぞましいジャンプの歌を始めないのか？

ヴーム、ローオ、オー／ヴーム、ローオ、オー／蛇どもを踊らせよ、死者たちを祓え

「醜さ」をもつというコンゴのファン族の歌を歌うには詩人にはまだ理性が残っている。理性とはここではアフリカのなものと対立するヨーロッパ的素養である。詩人はその理性をかなぐり捨ててファン族の歌を歌い始める。しかしながら、歌を歌っているその声を何かがすぐさまねじ曲げるのだった。

Mais qui tourne ma voix? qui écorche ma voix? Me fourrant dans la gorge mille crocs de bambou. Mille pieux d'oursin. C'est toi sale bout de monde. Sale bout de petit matin. C'est toi sale haine. C'est toi poids de l'insulte et cent ans de coups de fouet. C'est toi cent ans de

ma patience, cent ans de mes soins juste à ne pas mourir. / rooh oh (st. 69) (p.29)

しかし誰が私の声をねじ曲げているのか？ 誰が私の声を耳障りなものにして
いるのか？ 私の喉に千の竹の鉤. 千のウニの棘. それはおまえだ, 忌々しい世界
の果てよ. 忌々しい暁の果てよ. それはおまえだ, 忌々しい憎しみよ. それはおま
えだ, 屈辱の重みよ, 百年間の鞭打ちよ. それはおまえだ, 百年間の私の忍耐よ,
百年間のただ死なないためだけの私の苦心よ. / ローオ, オー

「私の声」をねじ曲げる「おまえ」と名指しされているもの, それはより具
体的には「百年間の鞭打ち」や「忍耐」, 「死なないためだけの私の苦心」と述
べられている. これらつまり奴隷の経験のことである. そのせいでファン族
の歌がうまく歌えないのだ. アンティユの黒人として奴隷の経験を経た以上は
もう純粋なアフリカへの回帰は適わないということである. このようにしてフ
アン族との同一化, アフリカへの回帰の試みもまた挫折してしまう.

4. 新しい「黒ん坊」の誕生

詩人は次々とアンティユ黒人の心性を列挙する.

Et voici ceux qui ne se consolent point de n'être pas faits à la ressemblance de Dieu mais du
diable, ceux qui considèrent que l'on est nègre comme commis de seconde classe: en
attendant mieux et avec possibilité de monter plus haut; ceux qui battent la chamade devant
soi-même, ceux qui vivent dans un cul de basse fosse de soi-même; ceux qui se drapent de
pseudomorphose fière; ceux qui disent à l'Europe: « Voyez, je sais comme vous faire des
courbettes, comme vous présenter mes hommages, en somme, je ne suis pas différent de
vous; ne faites pas attention à ma peau noire: c'est le soleil qui m'a brûlé ». (st.166) (p.52)

そしてここに自分たちは神の似姿ではなく悪魔のそれであることを諦めきれない
者たち, 自分たちは二級の使用人のようなニグロである—さしあたってはそうだが
もっと上へ昇れるかもしれない—と思っている者たち, 自ら進んで降伏の太鼓を叩

く者たち、自分自身の牢獄の底で生きる者たち、誇らしげに仮像を身にまとう者たち、ヨーロッパに対し「見てください、私はあなたのように平身低頭できますし、あなたのようにうやうやしく挨拶することもできます、要するに、私はあなたと違わないのです。私の黒い肌は気にしないでください。太陽が私の肌を焼いただけです」と。

自分の人種について、呪われている、劣等であると捉える者たち、はじめから諦める者たち、自己否定の底に落ちる者たちがいる。一方で、白人に少しでも似るよう偽りの繕いをする者たち、たまたま生まれつき肌が黒いだけで開化した白人と何ら変わらないと言い張る者たちがいる。これらの自己認識はすべて白人を中心としている。白人に近づくことが人間になることであり、黒人は自分の中に白人の視点を植えつけ自分自身を疎外している。外部からの視線を過剰に意識し、自己の心情と見分けがつかないほどに内在化させたのである。

しかし、詩人はこれらを古びたネグリチュード(黒人の姿勢)だと切り捨てる。そして最後に現れるのは荒れた海を進む奴隷船のイメージである。

le négrier craque de toute part... Son ventre se convulse et résonne... L'affreux ténia de sa cargaison ronge les boyaux fétides de l'étrange nourrisson des mers! (st.173) (p.54)

奴隷船はいたるところが軋んでいる……その腹は痙攣し音をたてる……船荷のおぞましいサナダムシがこの奇妙な海の乳飲み子の悪臭を放つはらわたを蝕む！

奴隷船は船荷に含んだサナダムシによって内側からその船倉を食い破られようとしている。船荷とはもちろん奴隷であり、彼らを閉じ込める船倉を彼ら自身の力で打ち壊そうとしている様子である。ここに至って詩人はかつて奴隷であったという集团的記憶と正面から向き合うことになる。船倉を破り今まさに生まれ出たのはまったく新しい「黒ん坊」(négraille)だった。

La négraille aux senteurs d'oignon frit retrouve dans son sang répandu le goût amer de la liberté

Et elle est debout la négraille

la négraille assise / inattendument debout / debout dans la cale / debout dans les cabines / debout sur le pont / debout dans le vent / debout sous le soleil / debout dans le sang

debout

et

libre (st.176-178) (pp.54-55)

揚げ玉葱の匂いの黒ん坊は散乱した自らの血の中で自由の苦い味を再び見出す

そしてその黒ん坊はすくと立つ

しゃがみ込んでいた黒ん坊は／唐突に立つ／船倉の中で立つ／船室の中で立つ／甲板の上で立つ／風の中で立つ／太陽の下で立つ／血の中で立つ

立て

そうすれば

自由だ

船倉を破ることは再び生まれることである。新しい「黒ん坊」は再び自由を発見する。そしてしゃがみ込んでいた状態から立ち上がる。立ち上がるそのたびに連鎖反応のごとく次々と自由を獲得していく。呪われていると信じ込んでいた自らの血の中にもしこの「黒ん坊」のように自由を見出すことができれば、生全般における自由への道は開かれているのだ。

結論

自らの血の中に自身を見出すことで、詩の冒頭部分で語られていた集団の深

い傷跡を受け入れることが可能になる。血は奴隷だった過去についての集団的記憶である。アンティユ黒人は船倉の記憶を共有している。それを過去から続く果てしない負の連鎖としてではなく、その記憶からヨーロッパやアフリカといった外在性から解放された自己認識をはぐくむことによって、ニグロは自由を勝ち得るのだと宣言し『帰郷ノート』は終わりを告げる。

使用テキスト

Aimé Césaire, « *Cahier d'un retour au pays natal* » in *La Poésie*, Seuil, 2006.

注

- (1) France Inter の番組「Le 6/7」, 2010年10月18日の放送より。
- (2) 1972年, マルティニーク生まれ。
- (3) Aimé Césaire, *Nègre je suis, nègre je resterai Entretiens avec Françoise Vergès*, Albin Michel, 2005
- (4) Aimé Césaire, *Cahier d'un retour au pays natal, Revue Volontés*, n° 20, 1939, pp.23-51.
- (5) Lilian Pestre de Almeida, *Les versions successives du Cahier d'un retour au pays natal, Césaire 70*, Edition Silex, 1984, pp.35-90.
- (6) ページ番号は使用テキストに依る。以下、同じ。

参考文献

Frantz Fanon, *Peau noire, masques blancs*, Seuil, 1972. (Seuil, 1952.)

M. a M. Ngal et Martin Steins (éd.), *Césaire 70*, Edition Silex, 1984.

砂野幸稔「エメ・セゼールにおけるネグリチュードの意識の誕生-『祖国復帰ノート』

解釈の試み」, 京都大学仏文研究室編『仏文研究 XIV』 pp.65-105, 1984年

エメ・セゼール『帰郷ノート | 植民地主義論 (平凡社ライブラリー)』, 砂野幸稔訳, 平凡社, 2004年

(文学部非常勤講師)